

## No.32 関根 伸夫 「対話のボラード」

Nobuo Sekine

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 7月1日付 立川市市報記事より

関根伸夫の作品には東洋の大地や風習に根差したえもいわれぬ趣がある。碑に彫られた文字のような痕や、「対話のボラード」という命名もそうだが、2つの車止めの持つ禅問答のようなユーモラスさもどこか東洋風である。

関根伸夫は日本の環境美術を一挙に押し上げた作家で、様々な形態の作品を多くの場で見ることができる。しかし、「位相・大地」と題された須磨離宮公園での鮮烈なデビュー以来変わっていないのは物質とその造形が人にもたらす意想外の驚きやユーモラスさだったと思う。ユーモアの感覚は、もしかしたら、石や人が共存する自然観を持つ東洋人に特有なものかもしれない。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

もう20年以上前のことになりますが、巡回展をやりながらヨーロッパ中を2年にわたって歩き回っていた時期がありました。この時、アートがさりげなく街中にとけこんでいるのを見た衝撃は今でも忘れることができません。

日本に帰ってさっそく環境美術研究所を設立し、単にアートを創るだけでなく、アートがよく見える環境をも演出するような仕事がしたいと思い、これまで多くの機会に恵まれてきました。しかしながら、やりきれていないなあというのが、正直な実感です。

パリの例をみるまでもなく、アーティストが街づくりや都市計画にまで絡んでプロジェクトをまとめていくという状況が、早く日本にも訪れることを願ってやみません。

それでも最近では環境アートに対する理解のある自治体が増えてきつつあるようです。

今回のファーレ立川のような大規模な計画がなされるのは、まだほんのわずかかもしれませんが、竣工したあかつきには、きっとこれまでのアート計画やアートそれ自体に対する見方、ひいては街づくりや都市計画のあり方などがぐっと変わってくると思います。

ひとつ残念なのは、単にアートをばらまいただけという印象が拭いきれないことです。

せっかく90人もアーティストを使っているのだから、もう少しアーティスト同士あるいはアーティストと建築家のコラボレーション的な要素があっても良かったのではないかと思います。

環境を考えた場合のアートは、数多く作品を並べただけでは決して成立しえないものだからです。